

表2 各集団の成績：2つの課題における粗点とZ得点

等質集団					異質集団				
Gr. I. D	乱数表集計		創造性検査		Gr. I. D	乱数表集計		創造性検査	
	粗点	Z得点	粗点	Z得点		粗点	Z得点	粗点	Z得点
G01	176	57.5	71	63.8	G17	149	50.2	65	59.0
G02	166	54.8	68	61.4	G18	148	49.9	63	57.4
G03	130	45.1	66	59.8	G19	99	36.7	45	43.0
G04	208	66.1	69	62.2	G20	155	51.8	62	56.6
G05	115	41.0	62	56.6	G21	108	39.1	32	32.4
G06	200	63.9	62	56.6	G22	94	35.4	25	27.0
G07	103	37.8	48	45.4	G23	143	48.6	71	63.8
G08	113	40.5	52	48.6	G24	166	54.8	55	51.0
G09	170	55.8	46	43.8	G25	201	64.2	52	48.6
G10	190	61.2	50	47.0	G26	115	41.0	42	40.6
G11	115	41.0	67	60.6	G27	113	40.5	56	51.8
G12	115	41.0	40	39.0	G28	152	51.0	53	49.4
G13	165	54.5	44	42.2	G29	201	64.2	56	51.8
G14	71	29.2	25	27.0	G30	145	49.1	47	44.6
G15	179	58.3	58	53.4	G31	183	59.4	42	40.6
G16	210	66.6	70	63.0	G32	146	49.4	55	51.0
平均		50.9		51.9			49.1		48.1
標準偏差		11.13		10.21			8.62		9.38

表3 集団成績の分散分析

SV	df	MS	F	
集団の構成 (A)	1	128.01	1.24	
課題のタイプ (B)	1	0.01	0	
課題の提示順序 (C)	1	118.21	1.82	p < .20
A×B	1	16.78	0.16	
A×C	1	176.20	1.70	p < .20
B×C	1	42.26	0.41	
A×B×C	1	18.18	0.18	
Error	56	103.52		

これらの成績を (A) 集団の構成：等質 vs 異質、(B) 課題のタイプ：構造化された課題 (乱数表集計) vs 構造化されない課題 (創造性検査)、(C) 課題の提示順序：前半 vs 後半、の3要因について分散分析した結果 (表3) によれば、3つの要因のいずれにも有意な主効果はみられず、また二次の交互作用、三次の交互作用のいずれにも有意な効果は認められなかった。したがって、等質集団と異質集団とでは課題のタイプによって成績に差異が現れるであろうというわれわれの仮説は支持されなかった。しかしながら、課題の提示順

序の主効果 (C) およびこれと集団の構成との交互作用 (A×C) にくいぶん大きいF値 (両側検定で p < .20) がみられる点が注目される。この点をいまいし詳細にみるため、課題の提示された時期が前半であったか後半であったかに着目して表4を作成した。これを図示したのが図1である。

図1によれば、等質集団は前半から相対的に高成績を達成しほぼ同じ水準を後半まで維持している (詳細にみれば、構造化された課題ではやや下降し、非構造化課題ではやや上昇しているかに見えるが、この差は有意でない) のに対し、異質集